



# 瀬田の丘

創刊 1973 年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部  
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



主日の説教

今日のみことば

年間第 5 主日 B 年 (2024 年 2 月 4 日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：ヨブ記 7 章 1—4、6—7 節

第二朗読：コリントの信徒への手紙一 9 章 16—19、22—23 節

福音朗読：マルコによる福音書 1 章 29—39 節

## 宣教するイエスさま

三つの朗読から

第一朗読に「<sup>ろうく</sup>「<sup>よよ</sup>「<sup>さだ</sup>「<sup>ほうしゆう</sup>「<sup>ほうしゆう</sup>「<sup>ほうしゆう</sup>」(3 節)とあります。ヘブライ語で「アーマール」  
だそうですが、多くの場合、仕事<sup>くら</sup>が持つ暗く、つらい側面<sup>そくめん</sup>が強調<sup>きようちよう</sup>されるときに使われるのだそう  
です。働き<sup>はたら</sup>や仕事、労働<sup>わざわ</sup>が苦しみと災い<sup>わざわ</sup>と見なすのか、喜び<sup>よろこ</sup>と見なすのかで、人生は変わって  
くでしょう。喜びとなるためには、何か特別な意味を見いだす必要があります。

第二朗読の冒頭<sup>ぼうとう</sup>、「わたしは不幸<sup>ふこう</sup>なのです」(16 節)は印象的です。パウロにとって、福音を  
告げ知らせるのは喜びでした。もちろん、困難<sup>こんなん</sup>も伴<sup>ともな</sup>います。しかし、宣教のために彼は、あらゆる  
困難を背負い込みます。なぜなら、キリストの愛から、だれ<sup>だれ</sup>も彼を引き離<sup>はな</sup>すことはできないから  
です(ロマ 8 章 31—39)。むしろ、告げ知らせる使命<sup>しめい</sup>が果たせないとき、不幸であると感じて  
います。

福音の中にある小さなことば、「一同<sup>しゆうどうめ</sup>をもてなした」(31 節)に注目<sup>しゆうどうめ</sup>しましょう。ペトロの姑<sup>しゆうどうめ</sup>は  
喜んでイエスをもてなします。それは救われた者がイエスに対する最大<sup>たいおう</sup>の対応<sup>たいおう</sup>です。イエスに仕  
えるとは、神に仕えることに他なりません。

説教：宣教するイエスさま

宣教活動を始めて、歩み始めたイエスさまは、二組の兄弟(シモンとアンデレ、ヤコブとヨハ

ネ)を見て、「<sup>したが</sup>従いなさい」と声をかけました。そして彼らとともにカファルナウムの町へ入ります。先週の朗読箇所は<sup>かしよ</sup>その会堂での出来事でした。今日の朗読箇所はその続きです

29 節の「<sup>いっこう</sup>すぐに、一行は会堂を出て、シモンとアンドレの家に行った」に注目してください。場面を<sup>そうぞう</sup>想像してみましょう。「会堂」で悪霊に憑かれた男から悪霊を追い出したイエスさまは、ペトロの「家」に入り、<sup>い</sup>姑の熱病を癒します。それから夕方、日の沈む頃(32 節)、「戸口」に集まってきた病気や悪霊に取り憑かれた人々を、「戸口」で癒します。

「会堂」というイスラエルの人々にとっての宗教生活の場面、「家」という人にとっての日常生活の場面、そして「戸口」という公共的な生活の場面と話が続きます。カファルナウムでの最初の日で、イエスさまは人間のありとあらゆる生活の場面で、人間を苦しめる悪の力を<sup>くちく</sup>駆逐していったのです。まさにすべての人々にイエスさまは<sup>かか</sup>関わるのです。イエスさまの生涯を<sup>しょうがい ぎょうしゆく</sup>凝縮し、<sup>あんじ</sup>暗示する一日でした。

次に 32 節に注目しましょう。「手を取って<sup>お</sup>起こされる」、「もてなす」とあります。「起こす」という動詞は、イエスさまの復活を暗示する言葉です。

「もてなす」は、原文では「ディアコネオー」です。元々は食卓で<sup>きゆうじ</sup>「給仕する」の意味ですが、<sup>ほうし</sup>奉仕を表すときの「<sup>つか</sup>仕える」の意味もあります。イエスさまによって癒されたペトロの姑は、その喜びを<sup>こうい</sup>行為で表現します。「彼女は「喜んで」一同をもてなした」と「喜び」という言葉を<sup>おぎな</sup>補って読んでみたらよいでしょう。イエスさまと出会い、イエスさまによって救われた人はいつも喜びを表すのです。

35 節には「そこで祈っておられた」とあります。イエスさまはよく祈ります。しかも、弟子たちから<sup>はな</sup>離れて、一人で祈ることが多いです。ゲッセマネでの祈りがその典型となります。

そして、「そのためにわたしは出て来た」(38 節)とイエスさまは言われます。イエスさまは祈りの中で、父なる神に<sup>ふ</sup>触れたのでしょうか。そして父なる神から<sup>しめい</sup>使命をいただき、そこから<sup>はけん</sup>派遣されたと理解したのでしょうか。それが「出て来た」という表現に<sup>しめ</sup>示されます。イエスさまの強い使命感です。

同じ節の「近くのほかの町や村へ行こう」は考えさせられます。イエスさまを<sup>さが</sup>捜す人々、待ちわびている人々がカファルナウムにはたくさんいたのでしょうか。「みんなが捜しています」は、そのことを<sup>ばいめい</sup>教えてくれます。しかし、イエスさまは<sup>きようみ</sup>出発します。売名行為や金集めに興味があれば、カファルナウムに<sup>のこ</sup>残って次々に<sup>きせき</sup>奇跡をおこなったはずですが。しかし、イエスさまは出かけていきます。それは、父なる神との交わりの祈りの中で、自分の使命に気がついたからです。イエスさまの使命は<sup>の つか</sup>「宣教」でした。宣べ伝えることでした。奇跡はそのための<sup>しゆだん</sup>手段にすぎなかったのです。